
カラマリチャンネル

木本 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラマリチャンネル

【Nコード】

N5489E

【作者名】

木本 雨

【あらすじ】

困った人を助けるのが仕事のクロトとマリ。今日のミッションは【引籠もりの魔法使いを救出せよ！】その他もろもろ助けます。

プロローグ

「・・・？」

朝の通勤中、彼は自分の頭に違和感を覚えた。

さいきん髪が薄くなってきたこともあり、気になって頭を触る。ぐちより、と手のひらに嫌な感触があった。そして彼は予想する。

これは、あれだ。あの白い・・・あれだ。

手を見ると予想通りに、白い糞がついていた。

この腐れ鳥類が！絶滅しやがれ！！

毎日のように上司に叱られ、下の連中には陰口されストレスが蓄積されていた彼は、思わず叫びそうになる。

しかし彼の頭の中に、ある言葉が響いた。

『悪口はいけませんよね。ほんとうに。この間、たまたま見かけたんですが、どうやら私は相当の嫌われ者のようです。ものすごい量の悪口が、とあるサイトにかかれてました。それもそういうサイトは1つや2つじゃないのです。まあ、仕方ないでしょうけど、だけど、すこーーーーーし、私は怒ったので、予言をします』

それは彼がたまたま見た番組での事だった。

狐の面をつけた少女と、同じく面をつけた背の高い男。

番組の内容は世界の不思議な力を持つ人物を紹介する、というようなものだったと思う。

その二人は、ちよくちよくそういう系統の番組で出ていたので、彼も知っていた。

超能力か何だか知らないが、馬鹿馬鹿しい。こういう事でしか金が稼げない詐欺師め。

彼は元々そういう不思議な力を信じない人で、しかもその時は仕事かたまたま行き詰っていたので、これは間が悪かったとしか言い様

がない。運が悪いとも言っ。

彼はパソコンを立ち上げると、さっそくサイトを探した。

検索はすぐヒットした。たくさん悪口のカキコミがある。

ざまあみろ。

そう思いながら、彼はさっそくサイトを閲覧する。

彼女達に対する罵詈雑言、中傷のカキコミ、それを見る度に彼は高揚した気分になった。

そして遂に彼は自らカキコミをした。

件名 狐さん

てめえら気持ち悪いんだよ、頭だいじょうぶか？てか精神病？妄想癖でもあるんじゃないやねえのwwそんな番組に出てないでさっさと病院いったらどう？あ、でももう手遅れかwwww人間にはチャンネルがたくさんある？なんのアニメの影響だよwwwwもういい加減あきた。ね。れxx女とかもう されてxxの方がいいんじゃないやねえwwwwww

そして彼は後悔することになる。

あの狐は・・・なんて言っただけ。

そっだ、こっ言っただ。予言したんだ。

『もっと非道いこともできるのですが、まあ、いいのです。とりあえず、予言。明日は晴れてても傘を差しての方がいいですよ。たとえ、家の中でも。私を好く思っていない人は、頭に運が落ちてきます。どうかお気をつけ下さい』

くすくすくす。

どこかであの狐が笑う声が聞こえた。

その日から彼は改心したらしい。が、それはまた別のお話。

ヒキコモリ魔法使いは勇気がほしい：序章

私は勇気がほしい

午後8時、A県のあるアパートでは愉快的笑い声が響いていた。

「く、つくつく、あははははははは！！」

「笑い事ではないのです」

テレビを指差して腹を抱えて笑っているこの男は、山上黒兎。

そして男をお手製のハリセンで容赦なく叩いている少女は、山上鞠という。

二人は、巷で噂の狐さんが出演したオカルト系の番組を見ていた。

「しかし、君も案外おこりっぱいんだな。僕ならあんな事ぐらいで怒らないぞ」

「くろたは感情が麻痺しているから、普通の人間の気持ちなんて分からないのです。1ミリも理解できないんでしょう」

「いや僕にだって、感情はあるさ。現に今こうして笑っている。これが感情っていうやつだろう？」

さわやかな笑顔を見せて、鞠の頭を撫でる黒兎。

この黒兎という男は、優しそうに見えて、意外と腹黒い。故に憎しみとほんのちよっぴりの愛情を込めて黒兎の事を鞠は『くろた』と呼んでいる。くろたを漢字で書くと『黒太』。黒くて神経がず太い。彼にぴったりの愛称である。

しかし、黒兎の優しさを知っている鞠はいつもそんな彼に逆らえなかった。今回の件だって、黒兎が原因だった。

『困った。お金が無い』

ちっとも困った風ではない黒兎がそう言ったのは、先月のことだった。

最近の仕事が無く、それによりお金が無いのは必然。これは当然の結果だ。「働きなさい」鞠は冷めた目で黒兎に抗議する。

そんな鞠を見て、申し訳なさそうに、あくまで顔だけは申し訳なさそうにして、黒兎は言った。右手には狐のお面。左手にはA4サイズの紙。紙には大文字で『あなたの周りの超能力者さん：番組出演者募集中』。

『と、言う訳でこれに出てくれるかな？鞠ちゃん』

そしてこの番組がきっかけで、この1ヶ月の間に雖はテレビで様々な活躍をした。

狐の面を付け、黒一色の服を着て、隣には謎の狐男を引き連れて登場する鞠の容姿はかなり目立ち、二人はそれなりに資金を稼ぐことができた。ちなみに狐の面を付けたのは、単に顔を隠すためである。結果的にその怪しげな格好が世間には受けたのだが。

そして1ヶ月の最後の日、鞠はちょっとした予言をした。自分の言葉は嘘ではないと示すために。まあ、それは建前でただ怒りを発散させるためなのだが。

しかし、愉快だな。と、黒兎はもう一度わらった。今度は本当に嬉しそうに。

予言をする前の日のことである。

自分の悪口が書いてあるサイトを見て、ぐちぐちと呪いの言葉を呟いていた鞠がほんの一瞬だけ動作を止めた。

普段から一緒にいる黒兎じゃないと分からない、その一瞬。パソコンの画面にはこう書かれていた。

件名　でかい方の狐だけどさ

でかい方の狐とは、確認するまでもなく黒兎の事である。おそらくは好くなくことが書かれている。

それからパソコンを閉じた鞠は一人呟いた。『許さない』 小さな声だったが、黒兎には確かにそう聞こえた。

あの予言が自分の為とは限らないが、自分の為に怒ってくれたのなら、本当に嬉しい。

それに自分はそれぐらいには、彼女と仲が良くなっているだろう。

そう確信できた黒兎は小さな声で、独り言のように呟いた。

「ありがとう」

上山黒兎という人間はとんでもなく素直じゃないのである。

ヒキコモリ魔法使いは勇気がほしい：第1幕

こちら雛。ターゲットを発見した。

妙に格好をつけた雛の声が、携帯から響いた。

「おーけー。アタックを開始する」

ぼくらは今、お仕事まっ最中だった。

「・・・すいませーん、貴方もしかして不幸じゃないですか？え？宗教勧誘？ちがうちがう、僕はちゃんとした、あ、おーい・・・まってー・・・かなしいよー・・・」

これで何度目のアタックだろうか？僕はさっきからフラれ続けた。100回はフラれた。このままだと、僕はコワレてしまふ。夏の暑さでじゃなくて、精神的ダメージによって。

そもそも何で僕はこの暑い中、ダークスーツなんか着ているんだ？仕事の格好？^{ユニフォーム}冗談じゃない。今度からはクールビズを取り入れてアロハにしてほしい。あつい、あーつーいーよー。えーんえーん。

「大の大人が道端で泣くななんて情けないのです。・・・ほら、アイスおいしいですよ」

人の通行を阻みながら泣いていると、雛が見かねてアイスを持って来てくれた。

「ふむ・・・。これ、さっきまで雛がくわえてたよな」

「それがどうかしたのですか？」

「間接ちゅーだな」

「返してください」

とりあえず、華麗にスルーをしてアイスをくわえた。む・・・いちご味。

「初めてのキスの味はイチゴでした」

「やめてください」

詩的な表現をしたが、却下されてしまった。残念。それはそうと、さっきの願望を話してみよう。

「クールビズを我が社では取り入れたいと思うのだが・・・、どうだね？雛くん」

「特に必要がないと思います。汗水流して働けばいいのです」

あまりの言葉に僕は（ ） 呆然とした表情、をしてしまう。最近分かったのだが、雛はS属性なんだと思う。僕がさつきから仕事に失敗しているのも、雛のSっ気によるものだと思分析している。はつきり言おう。僕らの仕事で一番重要なのは、運と勘だ。

今のところツンツンツンツンとしている雛の言うことを聞いても、仕事が来ないだろう。

かといって、言うことを聞かなければ、仕事は一向にやって来ない。僕には、忍耐が必要。耐える事が最初の仕事なのだ。

「ちなみに、雛には優しさが必要」

「何か、言いましたか？」

にこやかに笑う雛。間接をバキボキならす。額の青筋が怖い。さすがに怯えた僕は後ずさりをした。

しかし少々うっかり癖がある僕は、無駄にそのうっかかりを発揮する。うっかり後ろの人にぶつかって、うっかりその人を押し倒してしまった。

反射的に、その人が地面にぶつからないように、カバーをする。大地に背中を砕かれた。かなり情けない声で、僕はその人の無事を確認する。

「あの・・・大丈夫ですか？」

「はい・・・その、おかげさまで」

とても小さな可愛らしい声だった。女の人らしい。納得する。それにしても身長が小さいのに・・・。

・・・この大きさは・・・F・・・かな？

とりあえず、一旦その事を頭から切り離し、僕は彼女に謝った。

「誠に申し訳ございません。私のこのような不注意で貴女に危害を加えてしまって・・・」

「あのあの、本を読みながら歩いてた私の方が悪いから、それに、

怪我しないように助けてくれたし・・・」

だんだん声が小さくなり、顔があかくなる。

彼女は恥ずかしがりやなのだろう。何か・・・いい。今まで僕が
出会ってきた女性は変な人ばかりだったから、彼女がすごく良い子
に見えた。

「その、ありがとうございますっ！」

そう最後に大声で言うと、彼女はパンパンになったでかい紙袋6つ
をひょいっと持ち、足早に去っていった。

・・・6つ！？でかい紙袋6つ！？やはり、僕は変な女性とご縁
があるらしい。

驚愕している僕に、一部始終を見ていた雛は尻キックをした。

目は、さっきの彼女を追っている。

「ターゲット」

「は？」

「次のターゲットはあの娘なのです」

「・・・なんだって？」

「あの娘、魔法使いの匂いがある」

びつくりしている僕に、追い討ちをかける驚愕の事実。
とどめに雛は言った。

「何カップ？」

「たぶん・・・F？って、何をいわせるのさっ！」

「・・・変態」

冷やかな目が突き刺さる。

僕に大ダメージ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5489e/>

カラマリチャンネル

2010年12月30日18時53分発行